ネパール密教の護摩について

山 口 しの ぶ
（名 古 屋 大 学）

1．ネワール仏教僧が行なう護摩の次第

カトマンドゥに古くから住むネワール人の間にはインド密教の伝統を受け継ぐネワール仏教が広まっている。1994年８月２日，ネパールのカトマンドゥ市の北西部スワヤンブーナート寺院の南側のディメロン地区に住むネワール仏教僧ラトナカジ・ヴァジュラーチャールヤ Ratnakajee Vajracarya 氏の自宅で護摩が行なわれた。氏の家庭ではこの年長男と次男がそろって結婚したこともあり，家庭内の息災や家人の病気を払う目的で護摩が行なわれた。この護摩は以下の順序で行なわれた。

A　準備――――――護摩炉，器具，供物の用意

B　予備的儀礼――瓶供養（kalaśārcanapūjā）

　B-1　師マンダラ供養（gurumaṇḍalapūjā）

　B-2　三段梯による観想法（三三昧，trisamādhi）

　B-3　ヨーグルトの容器，灯明および瓶の供養

C　中心的儀礼――護摩（homa）

　C-1　炉の浄化と点火（agnisthāpana）

　C-2　アグニ神への奉献（agnyāhuti）

　C-3　本尊（阿閦如来）の供養と奉献

C-3-1　本尊の供養（devapūjā）

C-3-2　本尊への供物の奉献（devatāhuti）

C-3-3　本尊への「千投奉献」（sahasrāhuti）

C-4　バリ供養および聖地等の供養

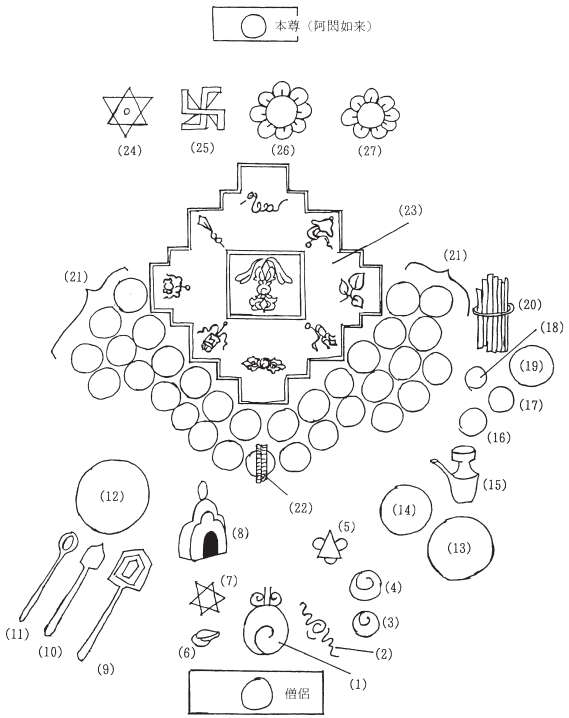
C-5　満炉奉献（pūrṇāhuti）

C-6　残りの供物の奉献（śeṣāhuti）

午前7時過ぎには，ラトナカジ氏の自宅の三階の室内には護摩炉が設置され，氏の家族は器具や供物の用意を進めていた。炉や器具，供物等の配置は図1の通りである。この護摩は前半の予備的儀礼である瓶供養と後半の中心的儀礼である護摩とに分けられる。前半の瓶供養はさらに(1)師マンダラ供養，(2)三階梯による観想法，(3)ヨーグルトの容器，灯明，および瓶の供養の三部分よりなるが，(1)，(2)に関してはすでに以前述べた。[(1)] (3)がこの予備的儀礼の中心である。

ここでは僧は金剛駒，金剛索，金剛鎖，金剛鈴の四招印を結んで本尊阿閦如来を瓶の中に招き五種供養等を行なう。さらに僧は五色の糸の端を持ち，糸の片側を引っ張り，その先を本尊が宿る瓶の上に載せる。このようにして本尊と五色の糸で接触を保ちながら，僧は真言の念誦を行なう。[(2)] 以上に述べたこの瓶供養は次の中心的儀礼の護摩の本尊阿閦如来を招くための行為であり，瓶供養なしで護摩を行なうことはできないとされる。[(3)]

瓶供養が終了した後，中心的儀礼の護摩が始まる。護摩は先に示したC-1からC-6のプロセスで行なわれた。C-1の炉の浄化と点火においては僧はまずスルパー大杓で炉の中のゴージャ（米粉を練って須弥山の形にした供物）に触れ，ネワール仏教では僧侶の師と考えられる金剛薩埵に敬礼する。その後祭主は炉の中にクシャ草（代用品が用いられる）を置き，炉を浄化する。炉が浄化された後，祭主は僧の指示に従って護摩木（段木）



(1)師マンダラ(gurumaṇḍala) (2)スパーンヤ・ゴージャ(spāṃyagoja) (3)五甘露の容器(pātra) (4)五種の牛の産出物(pañcagavya) (5)灯明(mata) (6)法螺貝(śaṅkha) (7)サマーディ・バリ(samādhibali) (8)宝冠(mukuṭa) (9)スルパー杓(sulpā) (10)チャトヴァー杓(catvā) (11)ダガ杓(dhagaḥ) (12)線香の容器 (13)供養盆(pūjābhāṇḍa) (14)果物の盆 (15)水瓶(nīlaḥ thal) (16)ギー(バター油)の容器 (17)シンドゥーラ(赤い粉)の容器 (18)灯芯の容器 (19)ゴージャ(goja，米粉を練って須弥山の形にした供物)の容器 (20)段木(sintā) (21)32種の穀類，豆類(表1参照) (22)ホーンヴィー(hoṃvī，18種の乳木を巻いた葉巻状の供物，図2および表2参照) (23)護摩炉(kuṇḍa) (24)バリ供物 (25)ダウパティ(daupati，ヨーグルトの入った容器) (26)瓶(kalaśa) (27)ナーガパン(nāgapan)

〈図1〉 護摩炉，器具，供物の配置

上図は Ratnakajee Vajrācārya, *Yeṃ Deya Bauddha Pūjā Kriyā yā Halaṃjvalam*, (Materials Required for Rituals of the Buddhist of Kathmanu), Nepal Bauddha Prakashan, 1980, Kathmandu, p. 10 を参照し，実際に使用された器具，供物を加えて作成した。

を炉の上に組む。僧は自身の前に素焼きの小皿を置き，その中に短く折った段木を組み，そこに点火する。祭主は炉の前に置かれた32種の穀類（表１参照）の入った皿から各々の穀物を少しずつ手で取り，僧の前の点火された小皿に入れる。それから宝冠を被り，鈴を鳴らしながら護摩儀礼執行のための宣言文（表白文）を唱える。それから祭主は小皿の中の火のついた護摩木を僧から受け取り，その火で炉に点火する。その際僧はこの護摩による祭主の利益を願う真言と「三昧耶アグニ」を観想する真言を唱える。(4)

〈表１〉 32種の穀類（名称はネワール語）

(1) ākhe（麦類） (2) tuyu hāmo（白胡麻） (3) hāku hāmo（黒胡麻） (4) siyu simpu（赤紫のインゲン豆） (5) svāṃvā（麦類） (6) īkā（黄色カラシ粉） (7) pākā（黒カラシ粒） (8) gogmāy（砕いた黒い豆） (9) koṃlā（豆類） (10) mū（緑色の小さい豆） (11) tacho（麦類） (12) kayagu（豆類） (13) bhuti（豆類） (14) tuyu simpu（白インゲン豆） (15) tāy（ポップライス） (16) phāphar（ソバの実） (17) masyāṃ（黄土色の小さい豆） (18) musyā（大豆） (19) canā（黄色いヒヨコ豆） (20) canā（茶色いヒヨコ豆） (21) kāvlecanā（白色で大きいヒヨコ豆） (22) cho（小麦） (23) vā（籾のついた米） (24) kayagu（豆類） (25) tu（サトウキビ） (26) khatyā（白色の種子） (27) gosagañcā（コリアンダーの種子） (28) hākumusyā（黒大豆） (29) vaklā（ソラ豆） (30) masryāsop（キャラウェイシード） (31) kāgan（雑穀の一種） (32) satavesī（果物の種子）

炉への点火の後，C－2 アグニ神への奉献が行なわれる。まず祭主はバター油の入ったダガ杓を僧から受け取り，炉の火の上で杓のバター油をかき混ぜながら溶かしていく。その後僧はアグニ神に敬礼し，罪を焼くための真言を唱えて，祭主からダガ杓を返してもらい，２本の杓を持ち，スルパー大灼のバター油を３回に分けて炉に注ぐ。バター油を供えた後，僧は炉に献ずるための18種の乳木を巻いた葉巻状のホーンヴィー（図２および表２参照）を手でちぎって炉に投げ供える。その後僧は32種の穀類にチャトワー杓で触れ，僧はその杓で，また祭主は手で２人で穀類を炉に入れる。

〈図 2〉ホーンヴィー

〈表 2〉ホーンヴィーに含まれる18種の乳木
(1) arka (2) palāśa (3) khadira (4) apamārga (5) vaṭa（バニヤン）(6) udumbara（ウドンゲ）(7) śamī (8) aśvattha（ボダイジュ）(9) plakṣa (10) brahmataru (11) madhu (12) aśoka (13) vikaṅkatha (14) āmra（マンゴー）(15) kadamba (16) gambhāra (17) bhillātaka (18) madanakaṇṭa

次に僧は護摩儀礼執行の宣言文を唱え，花，米，ポップライスを炉に供え，その後牛乳とバター油も供える。その後僧は米で作った「プローダーシャ」(puroḍāśa) と呼ばれる団子状の供物に杓で触れ，牛乳をかけた後，炉に入れる。それから再び32種の穀類を炉に入れる。その際僧は「智アグニ」(jñānāgni) を観想し，炉への点火の時に観想した三昧耶アグニと一体化させる真言を唱える。この部分の供物の奉献は「智アグニへの奉献」(jñānāhuti) と呼ばれる。

C－3の本尊阿閦如来への供養と奉献では，先に阿閦如来に供養が行なわれ，その後護摩炉に供物が投げ供えられる。祭主は阿閦如来像に線香，牛乳とバター油，シンドゥーラ，花，米，食物，灯火等を供える。次に本尊への奉献 (devatāhuti) が行なわれるが，ここでは僧は18種の乳木を巻いたホーンヴィーと32種の穀類を炉に入れる。その後僧はスルパー大杓と溶かしたバター油を入れたダガ杓を右手に持ち，左手で鈴を鳴らし，宣言文を唱える。宣言文を唱えた後，杓の中のバター油を炉に注ぐ。

次のプロセスである本尊への「千投奉献」(sahasrāhuti) はこの護摩の中心であると考えられ，しばしば護摩全体が「千投奉献護摩」(sahasrāhutihoma) と呼ばれる[(5)]。ここではまず祭主が阿閦如来に銀の指輪を供え，また僧も銀の指輪を付ける。その後32種の穀類を炉に供える。次に僧は炊

いた米をつぶして乾燥させたものを皿に入れ，その上に黒胡麻と白胡麻を載せ，さらにその上に赤い布（Skt. kaṣāya vastra, Nw. kasāy-gā）と布施を載せる。その後，米，胡麻，赤い布等の載せられたこの皿を持ち，僧は宣言文を唱える。宣言文を唱えた後僧は祭主の持つ皿を受け取る。再び18種の乳木および32種の穀類を炉に投げ供え，またバター油も炉に注ぐ。この行為は「赤い布への奉献」（kasāy-gā-āhuti）と呼ばれる。

その後僧は，赤い布を片方の肩にたすき掛にして身につけ，布の載せられていた皿の乾燥した米，胡麻にバター油と牛乳を混ぜて練る。次に僧は宝冠を被り，念誦を行ないながら，先の米，胡麻，バター油を練ったものを何回にも分けて炉に投げ入れる。この行為が「千投奉献」と呼ばれる。今までの奉献の供物はバター油や32種の穀類であった。しかしこの場面においては，祭主が僧衣としての赤い布と供物を布施と共に新たに僧に寄進する。そして僧は「赤い布の奉献」によりそれらの供物と布を浄化し儀礼にふさわしいものとし，布を身につけ，寄進された供物で千投奉献を行なうという次第が見られる。米，バター油などからなる供物を何回にも分けて火炉に供えた後，僧は再び32種の穀類をダガ杓で炉に入れ，さらにバター油を炉に注ぐ。その後百字真言を唱えてこの奉献は終了した。

C－4のバリ供養および聖地等の供養においては，まず祭主がバリ供物に五甘露（牛乳，ヨーグルト，バター油，蜂蜜，砂糖を混ぜたもの）を注ぎ，その際僧はレーヴァティー，バドラカーリー等のヨーギニーたちへの賞賛偈を唱える。その後祭主はバリ供養に線香，米，シンドゥーラ等を供え，僧は18種の乳木と32種の穀類を炉に入れる[(6)]。次に続く聖地等の供養においては，僧が霊場（pīṭha）や屍林（śmaśāna）などに敬礼し，金剛薩埵の賞賛偈を唱え，家族のメンバーが米を炉に投げ与える。

続いてC－5「満炉奉献」（pūrṇāhuti）が行なわれた。ネワール仏教の儀

礼の次第はしばしばバリ供養で終了するが，この奉献はバリ供養の後に行なわれる。この護摩の中心的行為は「千投奉献」であるが，この「満炉奉献」は儀礼全体を完全に成功させるための言わば駄目押し的行為である。ここではまず僧は真言を唱えながら，前日用意して紙に包んで籠に入れておいた32種の薬草や薬効を持つ種子等を包みを解いて次々と炉に入れる。ここで使用される供物は表３の通りである。

〈表３〉「満炉奉献」（pūrṇāhuti）で使用される供物

⑴ tṛphalā（薬草の一種）⑵ candagolī（粉末の香の一種）⑶ nāgakeśar（セイロンテツボクの花たく）⑷ kusum（セイロン・オークの種子）⑸ dhuṃ（線香）⑹ vāyūvidhaṃga（薬草の一種）⑺ trikuta（３種の薬草を混ぜたもの）⑻ byā（ベルノキの実）⑼ aṣṭasugandha（８種の香木の粉末を混ぜたもの）⑽ guṃgū（芳香を持つ樹脂）⑾ tālispatra（薬草の一種）⑿ gogujī（砕いたクミンシード）⒀ silāypho（サラノキ）⒁ agura（伽羅）⒂ sovaso（薬効を持つ種子）⒃ dhatur（チョウセンアサガオの種子）⒄ hoṃvī（18種の乳木を巻いたもの，図２および表２参照）⒅ madanapho（薬効を持つ実）⒆ havās（香辛料の一種）⒇ sarvauṣadhi（10種の薬草を混ぜたもの）(21) śrīkhaṇḍa（栴檀）(22) priyaṃgu（キビの粒）(23) hikhayo（薄茶色の鉱物）(24) imū（キャラウェイシード）(25) pañcasugandha（５種の香を混ぜたもの）(26) raktacandana（赤色のマメ科の植物の粉末）(27) nasvā（芳香のある草，甘松）(28) mi（フェンネルシード）(29) rūpakeśar（薬草の一種）(30) kalaśavāsa（薬効を持つ木を粉末にしたもの）(31) pañcagandha（５種の香を混ぜたもの，25とは別）(32) kuṭa（キク科の薬草）

薬草等を奉献した後，僧は32種の穀類を炉に入れる。次に僧は赤く着色した揚げパン（プーリー）とホーンヴィー，バター油および銀の指輪をスルパー大灼の上に載せ，右手にその杓を持ち，宣言文を唱える。宣言文を唱えた後，僧は炉に対して五種供養を行なう。その後儀礼に参加したメンバーは僧に布施をし，赤い粉（ティカ）を額につけてもらう。この後には「残りの供物の奉献」（śeṣāhuti）が行なわれた。これはバター油を炉に注いだ後，各々の皿に残された32種の穀類をすべて残りなく炉に入れる行為

である。以上で護摩のすべての次第が終了した。

2．供物から見たネワール仏教護摩

このようにネワールの護摩は火中にバター油，穀物などを奉献する行為を中心としているが，予備的儀礼として瓶供養を含み，また中心的儀礼の護摩の各次第において，奉献の前後に花や米，灯火等で供養が行なわれ，全体としては供養の中に奉献が組み込まれた形となっている。元来護摩と供養は異なった伝統を受け継いだ行為であった。シュルティ（天啓聖典）に基づくシュラウタ祭式のホーマでは，祭火に投じられた供物が祭火としてのアグニ神により天界の神々に届けられ，その見返りとして地上の人間に子孫や財産等の世俗的繁栄がもたらされると考えられた。

一方供養は儀礼の場に神を迎えて，座，水，食物などを供えたり入浴させたりして，相手を客としてもてなしてから帰ってもらうという形式で行なわれる。ヴェーダや家庭経（gṛhyasūtra）ではホーマや犠牲獣祭が一般的であったが，後世になると神々への礼拝の方法として供養が頻繁に行なわれるようになった。現代のインドでもシュラウタ祭式のホーマがわずかではあるが行なわれており，その場合はバター油や米粉を練って焼き上げた餅等が火中に投じられる。一方現代のネパール，チベットおよび日本の密教では供養と護摩の両者が結びついた形で行なわれている。ネワール仏教ではしばしば「ホーマ・プージャー」（homa-pūjā）という語が用いられ，護摩が供養の一種であると考えられている。

このネワールの護摩の各奉献に共通する供物は，バター油の他には32種の穀類およびホーンヴィーという葉巻き状の供物に含まれる18種の乳木である。32種の穀類とは大麦，小麦，胡麻，カラシ粒やソバの実等の雑穀，豆類等である。日本の護摩では５種の穀類，すなわち五穀が使用されるが，

ネワールの護摩では非常に多くの種類の穀類が用いられている。また，18種の乳木は表2の通りであるが，初期密教経典『蘇悉地羯羅経』（大正893）中巻「護摩法則品」にはすべての護摩に使用すべき乳木としてpalāśa，udumbara 等の12種の乳木が挙げられているが，それらとネワール護摩の乳木では8種類が一致する。また11～12世紀のアバヤーカラグプタ Abhayākaragupta の護摩に関する儀軌『ジョーティルマンジャリー』*Jotirmañjarī* の「供物に関する章」（dravyaprakaraṇa）においても udumbara，khadira，arka 等12種の乳木が挙げられているが[7]，そのうち10種類がネワールの護摩の乳木と一致する。各次第に共通して現れるバター油，穀類，乳木などは前もって儀礼の場に用意されていたが，この護摩の一番の中心部分である「千投奉献」においては，僧侶がその場で米，バター油，牛乳，胡麻を混ぜ合わせ新たに供物を作り，念誦を行ないながら何回にも分けて火中に投じる。

千投奉献に続く「満炉奉献」は護摩の終盤に行なわれる。満炉奉献はシュラウタ祭式における「火の設置の儀礼」（agnyādheya）の際にも行なわれる。シュラウタ祭式における満炉奉献は火を設置した後，その設置を完成させる目的で行なわれる。その場合，ジュフーという杓に入れられた一杯のバター油が火中に投じられるが，ネワールの護摩の場合は供物に関しては大きく異なっている。

ここで使用される供物は表3に見られるような薬草，香，薬効成分を持つ種子等である。例えば8のベルノキの実は下痢や栄養失調に良いとされ[8]，また12のクミンシードは食欲不振，消化力減退に効果があるとされる[9]。護摩を行なったネワール仏教僧ラトナカジ・ヴァジュラーチャールヤ氏によれば，この満炉奉献は，薬を奉献することにより祭主やその家族の人々の病気や障害を取り除こうという目的を持つ。

日本の護摩では供物としての五種の薬，すなわち五薬が知られている。五薬の種類は儀軌により様々であり，『覺禪鈔支度』（大正図像部５巻）には五薬の幾つかの種類が述べられている。たとえば不動護摩の際には赤箭(せきせん)，人参，附子(ぶし)，巴豆(はず)，石菖蒲が五薬として用いられる。これらはいずれも鎮静，胃の健康，利尿などの際効果を現わす薬であり[10]，煩悩という病を払う目的で五薬を火中に投じる[11]。日本の護摩では病が煩悩であるという仏教的な意味づけがなされているものの，病を取り除くという目的で薬草類が奉献されるという点ではネワールの護摩のこの部分と日本の護摩の五薬の奉献は共通した要素を含んでいる。しかし日本の護摩において五薬が蘇油や五穀，香等の献供と同様護摩の次第の全般にわたって使用されるのに対し[12]，ネワールの護摩では満炉奉献の場面でしか用いられない。

このネワールの護摩ではアグニ神への奉献の最後に米粉で作った「プローダーシャ」と呼ばれる団子状の供物を火中に投じる。プローダージャはシュラウタ祭式の新月祭満月祭でも使用されるが，シュラウタのプローダーシャが一度火で調理されてから使用されるのに対し，ネワール護摩のそれは生のまま火中に投じられる。

ヴェーダ祭式においては炉の祭火は供物に対していくつかの機能を供えていた。第一は供物の浄化，第二は供物を儀礼にふさわしいものに変容させること，第三は供物を熱することによって天界に到達するためのエネルギーを与えることである[13]。そして供物を奉献する前に祭火であらかじめ調理しておくことはそれを捧げる神々にとって喜ばしいことであり，供物は「すでに調理されたもの」（śṛta）でなければならないとされた[14]。

一方ネワール，チベット，日本の護摩では生の木，穀類等が護摩炉に投じられる。また密教の護摩においては供物の種類が非常に多様であり，それぞれの目的に応じて使い分けられている。ネワールの護摩の満炉奉献で

も病気や障害を取り除くために生の薬草類が用いられている。またアバヤーカラグプタの『ジョーティルマンジャリー』では油，米，麦，香木，牛乳などの他に，調伏が目的の場合には毛髪，尿，血，骨など通常の場合「不浄」とされるものを供物として用いられると言われる[15]。シュラウタ祭式のホーマにおいて調理されたものが供物として用いられ，密教の護摩において多様な供物が生のまま用いられると言う事実は，シュラウタ祭式において供物に対する火の機能が重視されていたのに対し，密教護摩では供養の側面が強調され，供物それぞれの持つ独自の性格が重要視されるようになってきたことを表していると考えられる。

註

(1) 服部（山口）しのぶ「バリ供養と聖なるもの」『仏教の受容と変容チベット・ネパール編』佼成出版社，1991年，pp. 241-269，および山口しのぶ「ネパールのマンダラ儀礼－師マンダラ供養－」『宗教研究』311号，1997年，pp. 202-203 参照。

(2) 吉崎一美「kalaśa pūjā とその造形」『印度学仏教研究』40巻 1 号，1991年，pp. 338 によればここで行者は仏神との合一を図る，あるいは仏神は糸を通って行者のもとにやって来るという。

(3) Locke, J. *Karunamaya*, Kathmandu, 1980, p. 106.

(4) これに関しては，山口しのぶ「ネパール仏教の護摩儀礼」『印度学仏教研究』45巻 1 号，1996年，p. 310 参照。

(5) この護摩の宣言文においては「千投奉献護摩を行なうために云々」という句が唱えられる。

(6) ラトナカジ氏は「バリ供物への奉献」(balyāhuti) と呼んでいる。

(7) これに関しては奥山直司「Jotirmañjarī の研究」『文化』47-1/2，1983，p. 130 参照。

(8) マジェプリア『ネパール・インドの聖なる植物』（西岡直樹訳）八坂書房，1989年，p. 108.

(9) アタヴァレー『アーユルヴェーダ日常と季節の過ごし方』（稲村晃子訳）平河出版社，1987年，（索引）p. 13.

⑽　二本柳賢司「護摩法における五宝五薬五香の医学的効果（１）」『密教学』第32号，1996年，pp. 69-87.
⑾　上田霊城『真言秘密事相概説－四度部－新安流を中心として』同朋出版，1986年，p. 664.
⑿　潅僧正秀『傳法院流息災護摩次第』加持世界社，1925年参照。
⒀　Vesci, U. M. *Heat and Sarcifice in the Vedas*, Motilal Banarsidass, 1985, Delhi, p. 89.
⒁　Vesci 前掲書，p. 25.
⒂　森雅秀「インド密教における護摩儀礼の展開」『印度仏教学研究』42巻１号，1993年，p. 417 参照。

［付記］本稿の執筆にあたり日本密教の五薬に関する文献について，種智院大学講師野口圭也氏に様々な御教示を頂いた。ここに記して謝意を表す次第である。